ゼロの使い魔　伝説の力を持つもの

ヴァリガワド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔　伝説の力を持つもの

【Ｎコード】
Ｎ１２４４Ｖ

【作者名】
ヴァリガワド

【あらすじ】
超一流高校の生徒会長を務める、青年が事故で死んでしまう、だが彼は本来まだ死ぬはずの人間ではなかったのだ、彼はカヲル君の姿を、した男にチートを貰い、ゼロ魔の世界に転生する

プロローグ（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

プロローグ

「にしても、どうすっかな～学園祭の出し物、色々ありたいものがあって迷うぜ」

高校に向かいながら俺は来月に迫っていた学園祭でやる出し物を考えていた、俺の大学の学園祭はとにかく規模がでかい、出来れば目立つものをやりたい

「う～ん生徒会長の力でも使うか？」

たまに生徒会長になって良かったと思う、そして信号が青になり横断歩道を渡っていたら横からパトカーが来て、そこからは覚えていない、俺の意識がブラックアウトしたからだ・・・・・・・・

「・・・い・・・・おい・・・おい起きろ」

・・・誰かに呼ばれてる？とりあえず起きてみるか、よっこいしょっと・・・え～～・・・一面真っ白手抜きか？

「どうやったらそんな言葉が出てくる？」

後ろから冷たいコメントが来たので振り向くと、驚くなかれカヲル君がいた

「・・・・・・・・・・なんでカヲル君？」

「やはりそう見えるか？」

いやいやカヲル君にしかみえね～って

「で、俺は死んだのか？パトカーに引かれて・・・」
「ああ。それは見るも無残な姿だ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「そう落ち込むな」

俺は膝を抱えて座っている、落ち込むよ、折角学園祭をエンジョイしようと思ったのに・・・

「まあお前は本来今死ぬはずではなかった存在、転生をさせてやろう」
「え・・・？」
「行くのはゼロ魔の世界でサイトの代わりに召喚されるぞ」

ゼロ魔限定なんだ・・・でもルイズに召喚されるのか・・・・なんかな～

「もちろんあの世界は死亡フラグだらけだ、お前には好きな能力をやろう、幾らでもいいぞ」
「ほ、本当？」
「ああ」
「じゃあ！身体能力はＭＡＸ魔力もＭＡＸ、俺の知ってるアニメ、漫画、ゲーム、小説の技、力が全て使えて、イメージしただけでその姿になれる変身能力をくれ、後どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる能力もな」
「わかった、・・・ムン！」

カヲル君が力むと俺の身体が光り、力が満ちてきた

「なんか・・・すげぇ・・・」

「変身能力を試してみろ」

俺はとりあえずお気に入りのスターダストをイメージした、そしたら一瞬で、スターダストになった

「すげぇ～」

「言い忘れていたが、お前はロバ・アル・カリイエ、日本の公爵家の次男にしておくぞ、ちなみに龍神族だ」

「龍神族ってドラクエじゃあ・・・」

「まあ気にするな。行って来い」

俺はカヲル君が開いた鏡に飛び込み出口を目指した

使い魔召喚！俺の使い魔は最強の狼と赤き龍の僕！！？？（前書き）

主人公・・・うらやましい・・・

使い魔召喚！俺の使い魔は最強の狼と赤き龍の僕！！？？

パシ～ン！シュ～～・・・着いたのか？周りを見てみると普通の部屋だな、うん、ここは、俺が転生した公爵家の部屋なのか？身体は縮んでないし、どうやら子供やり直す事はないようだ、にして、なんで父や母の記憶があるんだ？混乱を避けるためか？ちなみに俺の名前は、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、らしいです、部屋の本にそう名前が書いてありました、にしても、ヴァイスリーゼって・・・

コンコン、おっと誰来たな

「どうぞ」

「入るぞ」

今の声、父さんか、ってか父さんめっちゃ美形じゃん！てか若！見た感じ、３０程度にしか見えね～ぞ

「どうしたんですか、父さん？」

「いやな、お前は最近忙しすぎて、忘れているかもしれんが、お前はもう２１だ、本来なら、１６でするはずの使い魔召喚の儀を、行っていない、どうだ、これから行うというのは？」

へぇ～そうなんだ、転生前と年が変わってないな、つう事は父さんは一応４０歳ぐらいか、でも３０ぐらいにしか見えないな、にしても召喚の儀か・・・

「はいやります！」

「そうか！実は俺もお前のパートナーを見てみたくてな、では母さ

んを連れてくるからな、先に庭で待っていてくれ」
「はいでは」
俺は父さんに挨拶をして記憶を頼りに庭に向かった・・・にしても広いな～ここでもうオリンピック開けるんじゃないのか？さて両親が来るまで、俺の状態の確認だ、変身能力は・・・まあいいや、指には・・・なぜボンゴレリング？マントの裏にはボックス兵器あるだけど、ボンゴレボックスも・・・カヲル君・・・この世界だとやばいと思うよ、ポケットにはXグローブあるし、しかも集中したらハイパー死ぬ気モードになったし、色々とチートだな、しかも腰には斬艦刀っと父さんが母さん連れて・・・きた・・・
「あらぁどうしたの？」
「い、いえ、相変わらず母さんは美しいなあっと・・・」
「まあ♪」
母さんは頬に手を当てて喜んでいる・・・父さんにも驚いたけど母さんも凄いなあ美しいってレベルじゃない、もはや人間って枠を超えて女神に見えるぞ、にしても、今わかったが俺の親って、何でキョウスケとエクセレンなんだ～！！どうやらゲームのとは少し違うみたいだな、好きなキャラだけど、少し複雑・・・
「で、では使い魔を召喚したいと思います」
「うむ」
「さてさて、ドキドキの瞬間よ～！どんな子が出てくるのかしら～？」
うう～～少し緊張してきた・・・

「では・・・我が名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、五つの力を司るペンタゴン、我の運命従いし、使い魔を召還せよ!!!」

唱えるとゲートが開き更に大きくなっていった

「わぉ!これって結構大物が来るんじゃない?」

「ああ、大きさでは、5メートルを超えているな」

でかすぎだろ?タバサがシルフィード呼んだ時もこんなでかくなかったろ?おっやっとゲートの成長が止まったよ、でも7メートルぐらいか?お!なんかでてき・・た・・・

「クキャ〜〜〜!!!」

おいおいおいおいおい!!!!!なんでスターダストが出てくんだよ!!見ろ!父さんは少し口開けて驚いているだけだけど、って流石父さん、エクセ母さんなんて「わぉ!とってもきれ〜い!まるで夜空に輝く宝石みたいじゃな〜い!」ってはしゃいでるよ!何だよ・・・この状況・・・

「あら?ねえリュウちゃんあの龍の上に乗ってるあの子もリュウちゃんの使い魔じゃない?」

「え?」

よく見るとスターダストの上に何かがいる、白い毛並み、犬しては大きい、狼だな、うん、あの面構え、おいまさかあれは・・・そう思っているとその狼はスターダストから飛び降りて、俺にのしかかり、顔を舐めてきた、

「おいやめろって、アハハハハ、くすぐったいって」
近くで見るとやっぱりバトルウルフだ、テリーより少し小さいぐらいかな？
「あらあら♪リュウちゃんになつきまくりね♪」
「ではリュウ、契約を」
「あ、はいそれでは・・・我が名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
俺はバトルウルフとスターダストに口づけをして契約を交わした、そしたら、俺の腕が俺ぐらいにしか見えないの光を発した、よく見てみるとドラゴンヘッドの痣が浮かんでいた、おそらく赤き龍の僕であるスターダストを使い魔にした影響だろう
「父さん、母さん、これからこいつらと仲良くなりたいだけどいいかな？」
「いいに決まっている」
「仲良くするのよん♪」
そういって二人は去っていった
「さて、まずは名前だな、バトルウルフは・・・空、スターダストはスターだ。いいか？」
「コク」
「バウ！」
二人は嬉しそうに答えてくれた、そしていきなり鏡が現れ俺達を吸い込もうとした

「うわ！何だこれ！！？？」
「クワァ～～！！」
「バウウウ！」
そして俺達は鏡の中に飲み込まれた
「うわぁぁぁぁ！！！」
そしてズドーン！
「いったたたた・・・空、スター、だいじょぶか？」
「バウ♪」
「コク」
「よかった～～にしても何処だここ？」
「あんただれ？」
声のする方向を見ると桃色の髪をした少女がいた
「（やっぱりルイズか・・・）人に名を尋ねるときは自分から名乗るのが礼儀だろう」
「なんですって～！！」
「まあまあ、ミス・ヴァリエール落ち着いて・・・」
「ふん！私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！」
「ふむ・・・ちなみにここは何処だ？」
「ここはハルケギニア、トリステイン王国のトリステイン魔法学院です」
コルベール先生が丁寧に説明してくれた

「ご丁寧な説明感謝する」
「いえいえ、あのそれで貴方のお名前は？」
「これは失礼、俺はここから東の国、ロバ・アル・カリイエの公爵家の貴族、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼだ、お見知りおきを」

俺が挨拶すると、周りがかなり騒ぎ始めた
「ゼ、ゼロのルイズがき、貴族を召喚した・・・」
「じゃあ、あの後ろにいるのは使い魔か？」
「ミ、ミスタ・ナンブでよろしいですか？」
「ああ」
「ではミスタの後ろにいるのは使い魔ですか？」
「ああ2匹とも先ほど契約した俺の使い魔だ」

ザワザワ・・・また騒ぎ始めた

「2，2匹ともですか！？」
「ああ」

俺はそう言って、空とスターのルーンを見せる

「た、確かこれは使い魔のルーン・・・では呼ばれたのはミスタという事になりますな」
「まさかとは思うが俺に使い魔になれとは言わないだろうな？」
「あ、あたりまえでしょ！あんたは私に召喚されたのよ！おとなしく使い魔になりなさい！」
「使い魔にだと？・・・笑わせるな」
「し、しかし貴方に断れるとミス・ヴァリエールは留年といった形になってしまうのです」

「このような小娘の使い魔だと・・・お前達は俺の国と戦争でもしたいのか？ナンブ家は国では軍事の最高家、そこと戦いを望むのか？（ここで簡単に承諾するのはヤダしな）」

そういうと全員の顔が凍った、あ、面白い・・・

「それに俺は４属性全てのスクウェアだ」

「う、うそ・・・」

「信じられなければ、その目で見届けろ・・・ユピキタス、デル、ウインデ・・・」

俺がそう唱えると数十体のリュウガが現れた、ギドーは「じ、自分よりも遥かに上だ・・・」だといい、ルイズは「お、お母様よりも強いかも・・・」

「で、ではミスタ・ナンブ、すみませんが、魔法学園校長、オールドオスマン氏に会って頂けないでしょうか？」

「校長にか？構わんぞ」

「ありがとうございます、では、あっ少しお待ちください、生徒の皆さん、申し訳ありませんが今日の授業は中止とさせていただきます、後は各自教室に戻り自習とします、ではミスタ・ナンブあちらに見えますのが魔法学園となります」

「解かったではスターに乗っていこう、先生もどうぞ」

「あ、すみませんではお言葉に甘えて」

俺とコルベール先生はスターに乗り、空を膝の上に乗せ学園へと向かった、途中ルイズが何か言ったようだったが、良く聞こえなかったのでスルーした

使い魔召喚！俺の使い魔は最強の狼と赤き龍の僕！！？？（後書き）

すみませんプロローグで大学には生徒会がないとは知らずに書いてしまいました、これから訂正していきます

魔法学園

俺は今コルベール先生の案内で校長室に向かっている、今は空を連れて歩いている、流石にスターは無理だからな、おっとこんな事を考えていたら校長室に着いた

「ゴールド・オスマン、失礼します」

部屋に入ると言わずと知れたエロジジィとマチルダがいた

「ではまず自己紹介じゃな、わしはオールド・オスマン、この魔法学園の校長をしているものじゃ」

「俺の名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、ド・ヴァイスリーゼ領を治める公爵の息子である、ルイズという小娘のおかげでこちらに来てしまった」

「そ、それについては申し訳ありません」

「まあ、貴方が謝る事ではありますまい、できれば直ぐにでも帰りたいのですが、それはできますまい条件付で使い魔になってもいい」

「条件？」

「まず、衣食住の保障だ、俺はまだ慣れてはいない環境だからな」

「まあ確かに・・・」

「後、親の了解を取ってからだ、おそらく心配しているだろうからな」

「解かりました、ですが時間がかかるのでは？」

「問題ない」

俺は懐から遠交信の鏡を取り出した

「それは？」

「これで連絡を取る・・・あっ父さん？」
「リュウか！？あの後何処を探してもお前が居ないから心配していたんだぞ！」
「ご、ごめん、実は俺、ハルケギニア、トリステイン王国のトリステイン魔法学院の使い魔の召喚の儀で召喚されちゃって、使い魔のなんなきゃ俺を呼び出した子が留年しちゃうんだ」
「・・・大体流れはわかった、それで使い魔になるために俺に通信を取った」
「うん・・・」
「少し待て、エクセレンと話をする」
「うん」

しばらくして

「またせたな・・・話し合った結果お前の好きにしていいぞ」
「え、いいの？」
「ああその子の支えとなってやれ、そしてエクセレンからの伝言だ、たまには帰って来い、早く孫の顔を見たい、だそうだ」
「な！！！？？？そ、それが息子に言う台詞ぅ～～はあ・・・まあ母さんだしじゃあ切るよ」
「ああ元気でな」

カチ、俺は鏡をしまう
「許可は下りた、ルイズ嬢、契約しようか？」

いつの間にか居たルイズにいう

「いいの本当に？」
「ああ」
「じゃあ、ごほん！、我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラ

ン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

キスを終えたらルーンが刻まれた、そんなに痛くなかった、やっぱりガンダールヴ

「珍しいルーンですね、後でお調べいたしますので、スケッチさせていただきます」

「では、そういうことですから」

「わ、わかりました、出来る限り手を尽くします、」

「ああ」

「ではメイドのものに案内をさせますので、少しお待ちください」

「うむ、ルイズと同じ部屋ではないのか？」

「流石に狭いので少し間違う部屋とさせていただきます」

「解かった」

俺は用意されたいすに座り待たせてもらった

コンコン、おっメイドが来たか

「オールドオスマン、お呼びでしょうか？」

おっ誰かと思えばシエスタか

「メイドよ、コチラに居られるリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ様を貴族の来賓室に案内して欲しい、そしてこの方のお世話をしてくれ」

俺はオスマンと別れシエスタの案内で部屋に向かった

「あの、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ様」

おお良く一回で言えたな

「リュウガでいいよ、長いだろう？」

「で、ですが・・・」

「俺がいいといってるだ、構わないよ」

で、ではリュウガ様、ここが来賓室です。」

「ではシエスタ、聞きたい事があるから、時間をもらえるか？」

「私はリュウガ様の身の回りのメイドとされました、どんなお願いでも出来る限りお聞きします」

「そうか助かる、では聞きたいのだがトリステインでは貴族はどのような感じなのだ？やはり罰せられたりすのか？」

「い、いえそんな事はありません・・・貴族様の前を横切ったら、簡単に殺されてしまいます、きれいな娘を見つけたら問答無用で連れて行かれます」

「な！！それは誘拐ではないのか！？」

「いいえ、私達平民にどんな事をしても貴族様は罰せられません」

「ば、ばかな・・・」

「リュウガ様の国では違うのですか？」

「ああまったく違う、そもそも俺達貴族は平民、俺の国では国民と言っている、国民のおかげで生活できている、国民達が、愛情をこめて育ててくれた食量を食べ、国民が作ってくれた服を着て、国民が払ってくれた税で暮らしている、この国は腐っているな、シエスタ」

「は、はい！」

俺はシエスタの頭に手を置き撫でた

「リュ、リュウガ様？」
「君を辛かったろう、安心してくれ、俺は君達の味方だ、困ったら俺を頼りってくれ、泣きたいのなら胸を貸そう、他の人にも伝えてくれ」
「リュ、リュウガザマ～～～」

ついに泣き声になってしまった

「思いっきり泣きなさい、すっきりする」
「うわぁぁぁぁ～ん」

辛かっただな・・・・・・しばらくして

「す、すみませんでした／／／」
「いや気にするな、後これをとっといて、案内のお礼として」

俺はポケットからエキュー金貨を数枚だし渡した

「こ、こんな大金は頂けません！」
「いや貰っておいてくれ、シエスタも大変だろ？それで生活するなり、実家に送るなりしてくれ」
「あ、ありがとうございます」
「では俺は寝かせてもらうよ、おやすみシエスタ」
「お、おやすみなさいリュウガ様／／／／／／／」

そう言って俺は空と一緒にベットに入り眠りに着いた

授業

ふわぁ～良く寝た、俺は早起きだからな、今7時ぐらいってとこかな？まあ早起きではないか？空はまだ夢の中か・・・・一応ルイズを起こしにいくか、使い魔だし俺はベットで寝ている空に毛布を掛けて部屋を出た・・・ここがルイズの部屋か
ドアノブをまわすとドアが開いた、む、無用心だな、ルイズはっと、おうおう良く寝てるね、でもここらで起こさないと、朝ごはんが食べられなくなっちゃうからな、しょうがない

「ルイズ、ルイズ、朝だぞ～」
「う～ん・・・はぇ？起こしてくれてありがとう・・・ってあんた誰！？」
「リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、昨日ルイズに召喚された公爵家の息子だ」
「あ、そっか召喚したんだっけ・・・」
「ほらさっさと起きろ、お湯を用意したからそれで顔を洗って目を覚ませ」
「ああ、おはよう、でも貴方、こんなことしていいの？貴族なんでしょ？」
「大丈夫だ、俺は気にしない、俺の事はリュウでいい、父さんたちにもそう呼ばれていた」
「わかったわ、リュウ」

ルイズは顔を洗い着替えた、俺はその時は部屋の外にいたけどな、そしてルイズが着替え終わり、外に出るとキュルケが出てきた、ほんとにコイツまだ18か？

「あらルイズ、貴方の使い魔って本当に人間なのね、結構美形じゃ

ない」
まあ美形かどうかわからんがキョウスケ父さんとエクセ母さんの血を引いてるんだからそうなるのかな？
「そうよ、だからどうしたのよ？」
「私はとっても素敵な使い魔を召喚したわ、フレイム～！」
キュルケが名前を呼ぶとキュルケの部屋から　赤くでかいトカゲが出てきた
「火竜山脈の火トカゲ、サラマンダーか、ふむ・・・なかなか質が高いな、いい子だな」
「え？貴方なんでフレイムが火竜山脈の火トカゲってわかったの？」
「俺の領にも居たからな」
「そういえば貴方貴族なんだっけ？」
「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな、俺はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼだ、ここから東の国、ロバ・アル・カリイエの公爵家の次男だ」
「あらご丁寧に、私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ二つ名は微熱」
「ちょっとリュウ！何勝手にツェルプストーと話し込んでるのよ！」
「そうか、話しすぎてしまったな、ではミス・ツェルプストーこれで」
「ええ♪」
俺はルイズに手を引かれて食堂に向かった
「サラマンダー召喚したからって！なんなのよ！調子乗るじゃないわよ！」

「まあ落ち着け、ルイズだって使い魔を2匹持っていて、４属性スクウェアの俺を召喚したんだから十分凄いと思うぜ」
「まあいいわ、さあお腹も減っちゃったし、ご飯にしましょう」
「にしてでかいなこの食堂」
「全校生徒が食事するんですもの、このぐらい大きさじゃなきゃ」
「ふ～ん・・・でも使い魔の俺がここで食べるのはまずいだろ？俺は厨房に行ってなんか貰ってくるよ」
「そんなのでいいの？」
「ああ」

俺は校舎から出て厨房に向かった、歩いているとシエスタがこちらに歩いてきた

「お、シエスタ」
「あ、リュウガ様、どうしたんですかこんなところで？」
「いやな、使い魔である俺が食堂で食べるのは不味いと思ってな、厨房で何か貰おうと思って」
「じゃあ案内しますよ、後昨日の事をみんなにお話したらとても喜んでいたので歓迎されると思いますよ」

俺はシエスタの案内で厨房に向かった

「おうシエスタ、ん？そちらさんは昨日の話に出てきた人かい？」
「ええ、食堂では食べにくいからこちらで食べたいそうです」
「そうかそうか、俺はマルトーだ、ここの料理長をやってるんだよろしくな」
「ああこちらこそ、グゥ～、あ」
「おっと腹の虫が泣いたな」
「う・・・恥ずかしながら」
「さあこんなでいいなら食ってくれ」

そういってマルトーさんは、シチューを出してくれた

「ありがとう！俺シチュー大好きなんだ！」
「そいつはよかった！」
「では」

俺は両手を合わせた

「いただきます」
「それどういう意味だ？」
「ん？この料理になってくれた、命と作ってくれたマルトーさん達に感謝をこめたんだ、俺の国じゃあ食べる前はいただきますって言って食べ終わったらご馳走様っていうっだ」
「そりゃあいいな」

俺はシチューを口にしたらものすごく美味しかった

「ふう、美味しかった♪ご馳走様でした」
「お！綺麗に食べてくれるな～こっちも嬉しくなってきたぞ」
「じゃあ俺はルイズのところに行きますので」
「おう！何時でも来い！また美味いもん食わせてやる！」
「じゃあ今度来るときは故郷の酒持ってきますよ」
「そりゃあ楽しみだ！」

俺も能力さえあれば酒なんか簡単に作り出せるからな、そして俺はルイズの元に向かった、教室に要ったらルイズが居たので隣に座った、そして授業スタート

「皆さん、使い魔召喚の儀は大成功のようですね、このシュヴルー

ズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなんですよ」

だがルイズは俯く

「変わった使い魔を召喚したものですね、ミス・ヴァリエール」

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、平民連れてくるなよ」

「おい・・・」

俺が殺気を飛ばしながらデブに話しかける

「な、なんだよ！平民の分際で！」

「俺は平民ではない、公爵家の次男だ」

「う、嘘をつくな！」

「嘘などついてなんになる」

「では、証明して見せてください」

事の原因であるシュヴルーズ先生が言ってきた

「証明？」

「ええこれから錬金をやって見せようと思うのですが、貴方がやって見せていただけます？」

「ああ」

俺は教卓の前に立ち机の上に乗っている石ころを見て両手を合わせて、ハガレンのように石を純金に変えた

「こ、これは・・・」

「お望みのように錬金したぞ、後杖なしでやったのは指輪を返して行ったからだ、純金にしたが見てみるといい」

「え、ええ」

先生が魔法で確認する

「じゅ、純度１００パーセントです」

「これでわかっただろう、ルイズはゼロでない、スクウェアクラスの貴族を呼ぶ力を持っている」

俺は話し終えるとルイズの隣の席に戻った

「ほ、本当だったんだ、スクウェアだって事」

「信じてなかったのか？」

「まあ、半信半疑で」

その後ルイズが錬金を試みたが原作どうり爆発が起きた、因みに生徒の皆さんが怪我をしないように、ＡＴフィールドで防御しました、その際タバサに何故か睨まれました

決闘

今はルイズが起こしてしまった爆発で散らかってしまった教室の後片付けをしている、だが俺のＡＴフィールド破片は抑えたからそれほど散らかってはいない、そしてルイズの顔はとても悲しそうなだった

「これで解かったでしょ私がゼロのルイズって呼ばれている意味、どんな簡単な魔法でも爆発して成功しない・・・」

こりゃだいぶ根が深いな・・・ん？でも失敗したら何も起こらないじゃ・・・

「まあ落ち着けルイズよく考えてみろ魔法が失敗したらどうなる？」
「決まってるでしょ、何もおきない・・・ってあ！」
「そう、ルイズはちゃんと魔法が使えている、それにそれはほかの人とは違うルイズだけの魔法だ」
「私だけの・・・魔法・・・」
「そう、ルイズだけのな、それにルイズの魔法の見当はつく俺が指導すれば使えるようになる可能性は高い」
「ほ、本当！！？？」
「ああ、元々ルイズには底知れない素質がある、後はそれをどうやって開花させるかだ、今夜からはじめるぞ」
「なんでよ！今からやりましょうよ！」
「まだ授業があるだろう、俺のほうも準備があるからな」
「じゃあよる絶対ね！」
「ああ、じゃあ俺はそこらをうろついているからな」

俺は掃除を終わらせて教室を後にした、そして、転送用のボックス

（オリジナル）を開き日本酒を取り出した、マルトーさんへのお土産だ、俺は日本酒を片手に厨房に向かった

「マルトーさん」
「お！どうした？腹でも減ったか？」
「いや、食事のお礼と前言ってた酒を持ってきた」
「おっこれか故郷の酒ってのは」
「ああ、良かったら飲んでくれ、後手伝う事あるか？」
「いいのかい？下手したら他の貴族達に馬鹿にされるぞ？」
「構うもんか、貴族は貴方達、平民を守るが仕事た」
「クゥ～いい言ってくれるな～じゃあシエスタの手伝いをしてやってくれるか？」
「おう、まかせろ」
「いいんですかリュウガ様？」
「俺がいいって言ってるんだ、後、様付けはやめてくれ、照れる・・・」
「で、ではリュウガさんっと・・・」
「ま、いいか」
「では、デザートを運ぶのを手伝ってください」
「了解」

俺はでかい銀の更に乗せたデザートを貴族達に配っている、そうしているとギーシュと友人らしきもの達と会話をしていると、何かを落とした、やれやれ、世話の焼ける、俺はトレイをおき、俺はそれを拾った、香水だな

「おい、落としたぞ、色男さんよ」
「な、なにを言っているんだね、これは僕のではない」
「そうか、ここにいる皆に聞きたいことがある」

俺は大きな声を出しティータイムをしている、生徒に呼びかける
「この香水の持ち主を知らないか？出来る事なら持ち主に返したい！」
「うわわわ！待て！それは僕のだ！」
「なら最初に言え」
俺はギーシュに香水を渡した
「ん？それってモンモランシー嬢の香水じゃないか？」
「おお！そうだ！少し前に買ったから解かる、この紫色は彼女が自分のために作った香水だ、買うときに使ってたからな」
「（そういうことか）」
「そいつが、お前のポケットから落ちてきたってことは、つまり君は今、ミス・モンモランシーと付き合っている決定的な証拠だ」
その後ギーシュは原作どうりにモンモランシーとケティという1年生に平手打ちを食らった、俺はトレイを持ち直し仕事を続けようとしたら
「待ちたまえ」
「なんだ？二股男？」
俺がそう言うと周りは笑いに包まれた
「う、うるさい！き、君が軽率に、香水の壜なんか拾い上げたおかげで！二人のレディの心が傷ついた！どうしてくれるんだ！！？」
馬鹿かコイツ・・・
「二股を掛けるお前が悪い、ばれたら二人とも傷つくぐらい考えろ

馬鹿が」
「ば、ば！き，キサマァ～僕を侮辱するか～！」
「事実だ」←ズバッと！
「グゥ～！い、いいだろう！君に貴族に対する礼儀を教えてやる！」
「（怒りで冷静さを失ってるな、俺も貴族なんだが・・・）いいだろう、楽しませろよ」
「ヴェストリの広場で行う！来たまえ！」
「・・・」

俺は無言でついていく、すると後ろからルイズが駆け寄ってきた

「リュウ！見てたわよ！なに決闘の約束なんかしてんのよ！！」
「いや、あの馬鹿に少し俺の力を見せてやろうと思ってね」
「リュ、リュウガさん！危ないです！」
「心配するな」

心配する二人をよそに俺は広場に脚を進めた

「諸君！決闘だ！」
「ギーシュが決闘するぞ！相手はゼロのルイズの使い魔だ！」

なんか・・・知れ渡ってるな・・・

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやろうじゃないか」
「煩い、黙れ、屑、さっさと始めるぞ」
「クッ！いいだろう・・・」
「僕はメイジだ！だから魔法で戦う、よもや文句はあるまいね？」
「ない、俺もメイジだが素手でやってやろう」
「ふ！僕も舐められたものだ・・・いでよ！ワルキューレ！」

ギーシュが杖代わりにしているバラを振るとゴーレムが現れた、これがワルキューレか・・・

「僕の二つ名は青銅、青銅のギーシュだ、よって、この青銅のゴーレム、ワルキューレがお相手するよ」

「青銅とは強度がないな・・・」

ワルキューレは俺の腹を狙い殴りかかってくるが、俺はトリコのナイフでワルキューレを一刀両断にした

「な、なに！」

「この程度か・・・青銅のギーシュ」

「ま、まだ！」

更にバラを振りゴーレムを作り出す、数は6体ほどか・・・

「ふん、降参するなら今のうちだぞ？」

「俺も馬鹿にされたものだ・・・」

俺は剃を使いワルキューレの前に移動し、素手で殴り壊した

「な！！！いつの間！！ああ！ワルキューレが！！！」

「ゴーレムはこうやって作るんだよ」

俺は錬金でワルキューレを作り出す、他のでもいいが、ギーシュを屈服させるにはこれが一番いいだろう

「簿、僕と同じワルキューレ・・・」

「お前の粗悪品と一緒にするな」

ギーシュはそういわれて俺の作り出したワルキューレを見る、俺のワルキューレは、人間の細かい筋肉、顔、目、肌の色
徹底的に人間に近づけた物だからな、ギーシュは目を見開いている

「こ、これは・・・僕が目指すワルキューレそのもの・・・こ、降参です、こんな素晴らしいものを作れる貴方には、勝てわしない、出来れば名前を教えてくれ」
「いいだろう、俺の名を心に刻め！俺の名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ！
ここより東の国ロバ・アル・カリイエの公爵家の次男だ！」
「き、貴族だったのですか！？」
「ああ」
「すみませんでした！」
「俺よりあの二人に謝ってやれ」
「は、はい！あのできればゴーレム作りの師匠と呼ばせてください！」
「好きにしろ」

決闘（後書き）

なんか毎回毎回名前を言ってる気がします

祝いの酒

「おお！我らの英雄が来たぞ！」

今日は決闘の次の日、あの後は大変だった、ギーシュにゴーレムの作り方を伝授してくれだとか、他の貴族どもに詰め寄られたり、シエスタには熱っぽい視線を送られたし、ルイズの指導もしたが、予想以上だった、チート能力持った俺も少し引いたぜ、まあ何とか、爆発せずに精神力の制御はマスターしたけど、魔法としてはまだまだこれからだろう、俺は昨日と同じように厨房でご飯を食べさせてもらおうと来たんだが、マルトーさんに我らの英雄と言われて少し困っている、そういえば才人も我らの剣って言われてたな、今回もシチューも出して貰った

「ありがとう、マルトーさんの料理は美味いからな、これも一種の魔法だな」

「お！うれしいことといってくれるじゃ～ね～か！それにそれはここの貴族どもに出してる奴だからな」

「いいのか？俺も貴族だが、使い魔だぞ？」

「気にする事はね～よ！お前さんは俺達の味方であのむかついた貴族をぶっ潰してくれたんだ、しかも俺達の手伝いまでして貰っちゃって、お前はまったくいいやつだ！」

マルトーさんは俺の首に逞しい腕を巻きつけてきた

「なぁ、我らの英雄！お前の額に接吻するぞ！いいな！」

「その英雄って呼ぶのと接吻はやめてくれ」

「どうしてだ？」

「俺はあんたらが言うほどたいした人間ではないからな」

「なにいってるんだ！わかってるのか！？お前は幾ら青銅と言っても鉄を手刀でぶった切ったり、殴り壊したんだぞ？それにあの一瞬で消えた動きどうやったんだ？俺にも教えてくれ」

消える動きと言うのは六式の剃の事だろう、幾らなんでも無理だ、身体が勝手に動いたと言うほうが正しい

「っと言われても、体が勝手に動いただけさ」

「おい！お前たち聞いたか！？」

「聞きました親方！！」

親方ってマルトーさんのことか？

「真の達人ってのは偉ぶらないって者さ、そこがここの貴族のアホ～共とは違うのさ！」

「達人は偉ぶらない！さすがですな～！」

う～ん・・・これの状況はカオスだ、男性陣は明らかに尊敬してますって視線を送ってくるし、女性陣、特にシエスタは熱い視線を送ってくる

「おい我らの英雄、俺達はますますお前の事が気に入ったぞ」

「と、言われてもな・・・」

「おっそうだ！我らの英雄！酒は飲めるよな？」

「ああ、母さんがかなり飲むし、付き合いしてたからかなり酒には強いぞ？」

俺がそういうとマルトーさんは嬉しそうにシエスタのほうを向いた

「おい！シエスタ！」

「はい！」
「我らの英雄にアルビオンの古いの奴を注いでやれ、年代ものだから美味いぞ～」
「じゃあ貰おうかな？」

シエスタは満面の笑みで笑い棚からヴィンテージ物のワインを持ってきて俺のグラスに注いでくれた、匂いからしてわかる、かなり強い、アルコール度４０ってとこか、まあ母さんはもっと強いの飲んでたし、俺も普通に６０度台飲んでたからな、あれ？俺って結構な化け物？まあいいや！俺はシエスタが入れてくれたワインを一気に飲み干す、するとシエスタはうっとりした顔で俺を見つめる・・・これシエスタフラグが立っちゃたかな？

俺は食事を終えてルイズの元に向かう、授業が始まるとルイズは真面目にメモを取っている、一応公爵家の子だもんな
俺は退屈なので外で待っている事にした

「さ～てどうするかな～・・・まだ授業終わるのは時間がかかるしな～」

俺が暇そうにしていると前から自分より大きい杖を持った少女、タバサがこちらに来た、決闘で興味でも持たれたかな～

「・・・ねえ・・・」
「ん？なんだい？」
「・・・話がある・・・」
「話？」
「俺についてかい？」
「コク」
「（あちゃ～やっぱり興味をもたれたか～）」

「貴方と貴方が使った移動術に興味がある・・・まず貴方は何者？」
「俺か？俺はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ、ロバ・アル・カリイエの公爵家の次男さ、君は？」
「・・・タバサ・・・」
「タバサか・・・うん覚えたっでなにが聞きたい？」
「・・・貴方が使った移動術・・・」
「ああ、剃の事か」
「ソル？」
「これだろ？」

俺は剃を使い一瞬で２０メートルほど先に移動してみせる、タバサとても驚いていた、俺は再び剃を使い元の場所に戻る

「これで満足かい？」
「・・・すごい・・・教えてほしい・・・その魔法・・・風の魔法？」

いやいや、たぶん無理だと思うよ、それにこれ魔法じゃないし

「いやこれは魔法じゃない、体術だ」
「！・・・あれが体術？・・・ロバ・アル・カリイエの体術？」
「まあそんな所だ」
「体術でもいい・・・教えて・・・」
「むぅ～～～でもな～これは瞬間的に地面を１０回以上蹴らなければ出来ないだ、無理だと思うよ？」
「・・・わかった・・・次・・・あの龍は何？」

龍？ああスターダストの事か、なにといわれてな～説明むずいぞ？

「あの龍は俺の国に伝わる伝説の韻竜、赤き龍の子孫さ（そういう

事にしとこ）」
「韻竜！？でも絶滅したはず・・・」
「ん？こっちじゃあ絶滅してるのか？あっちじゃあ普通にいるぞ？」
稀に領に降りてくんだ」
「・・・貴方の国・・不思議・・・」
「そうか？おっそろそろ授業が終わるな、じゃあなタバサ」
「・・・また・・・」

本当無口だな、たぶんタバサは俺の力に興味を示すだろう、少し警戒するか、俺はそんな事を考えながらルイズの元に向かった

祝いの酒（後書き）

いや～タバサの話し方が難しい！読者の皆さん、

こんかいは本作の流れを紹介します

ルイズが魔法が使えるようになる

ルイズに回復能力を披露する

カトレア治療

ってのを考えています、後外伝でキョウスケとエクセレンも出したいと思います

突然ですがここでアンケートをとりたいと思います、これからお話が進んでいくわけですが、メインヒロインを誰にするか皆様の意見を教しえください

ヒロインは限定しません、ルイズでもシエスタでもカトレアでもタバサでも、お好きなキャラにご投票ください

今回のシエスタとのフラグは関係ありません

皆様のご協力お願いいたします

後ご要望がある場合はどんどん感想に書いて送ってください

ルイズ魔法成功　ヴァリエール家への誘い（前書き）

いや～ヒロインのアンケートの意見有難う御座います、まだまだ募集していますがいろんな意見がありました、王道のルイズやカトレア、タバサに、シエスタ、テファ、そしてモンモランシーとケティというご意見までいただきました、後一番驚いたのはスパロボＯＧ２のゼオラさん

というのも頂きました、まあキョウスケ、エクセレンだしてるんで出しても、問題はないのかな？っと考えております、でもこれで決定した訳ではありませんので、引き続きご意見お願いします

ルイズ魔法成功　ヴァリエール家への誘い

今日の授業が終わり、夜には再びルイズの魔法特訓が始まった

「では始める」

「・・・リュウ、こんなので私魔法が使えるようになるの？昨日だって精神を集中して練り上げる事しかしてないのに」

「いや、昨日の精神訓練で爆発の原因が掴めた」

「え！？ほんとう！！」

「ああ、ルイズは魔法を唱えるときに必要以上の魔力が出てしまって魔法が本来の形を保てなくなっていた、つまりだようは魔力の量を調節すればいい」

「な、なるほどでもどうやって調節するの？」

「ここがポイントだ、イメージが大切だ」

「イメージ？」

「そう、これは俺も母さんに言われたんだけどな「どんなに才能がある人ても必要なのがイメージなの！イメージするのは楽しいと思えることよん♪リラックスしてどんな魔法に仕上げたいか組み立てていくの、これが大事よん♪ではエクセレン先生の講座はおしまい！後は練習あるのみよん♪」って言ってたんだ」

「それで出来たの？」

「俺も半信半疑だったけど見事に成功して腕が再生したんだ」

「ってなんで腕を再生させるようなことになったのよ！」

「いや～狩行ったら後ろから火龍に不意打ちされて」

「それで治るって・・・」

「まあやってみよう」

「ええ」

ルイズは目を閉じてイメージをしている、次第にルイズの顔が綻ん

できた、そして・・・

「レビテーション！」

近くに置いた、石を2メートルほど持ち上げた

「リュ、リュウ、こ、これって・・・」

「まちがいなくレビテーションだ」

「じゃ、じゃあ私・・・」

「ああ、ルイズは紛れもなくメイジになった」

「やった～～～～！！！！」

ルイズは歓声を上げ俺に抱きついてきた

「うう・・・ありがとぉ～リュウ、リュウのおかげで私、私・・・」

「泣くな泣くな、俺は手ほどきをしただけだ、ルイズの力さ、さあ、学院長に報告に行って、両親に手紙でも書いてあげたら？」

「そ、そうねそれがいいわ！」

ルイズは走っていった

「・・・父さん、俺ルイズを支える柱になれたみたい」

故郷にいる、父に聞こえるわけがないが父に問いかけた

家族への手紙

やったやった！！ついにについに私本当のメイジになれた！！こんなに嬉しい日は初めて！学院長に魔法を見せたら家族のように祝ってくれた、とっても嬉しくて泣きそうになっちゃった、これもリュウのおかげよ、あ、そうだお母様たちに手紙書かなきゃ

お母様、お父様、お姉さま達、お元気ですか？私は元気です、今回手紙を送ったのはお知らせしたい事があったからです
少し前にあった使い魔召喚の儀で私は東方の国ロバ・アル・カリイエの公爵家のメイジのリュウ、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼを召喚しました
なんとリュウは４属性のスクウェアなんです、といっても私はまだ２属性の魔法しか見せてもらってませんがとても強くて優しい人です
リュウは私の魔法が爆発してしまうという事を話したら
「ルイズの魔法の見当はつく俺が指導すれば使えるようになる可能性は高い」っと言ってくれて指導を受けました
私の魔法が爆発してしまう原因は必要以上の魔力が出てしまって魔法が本来の形を保てなくなるという事でした、私はリュウから魔力の調節法を教えてもらい、最後に大切な事してイメージするのは楽しいと思える事をイメージしてリラックスしてどんな魔法に仕上げたいか組み立てていくという事でしたこれは
リュウのお母様の受け売りらしいのですが、これは半信半疑でしたがリュウはこの方法で火龍の不意打ちで失ってしまった腕を再生させたらしいのです
私もお母様達と笑いながら過ごすことをイメージしてレビテーションを唱えたら石が２メイルほど浮き上がらせる事が出来たのです！
私はついにメイジになる事が出来ました！
学院長に報告したら本当の家族のように祝ってくれました！とても

嬉しかったです！
リュウは私には底知れない素質があると言ってくれました私はその素質を開花させようとがんばりたいと思います！
だからお母様達も応援してくださいね？ルイズより

こんな感じでいいかしら？後はこれを伝書梟で飛ばしてと・・・お母様達喜んでくれるかしら？あら？リュウはいつの間にか戻ってきて壁にもたれかかって寝てるわ、むぅ～なんか恩人に対しての罪悪感が・・・まあ寝ちゃってるの起こすのはかわいそうだし、もう寝よう、おやすみ、リュウ・・・・・・ＺＺＺ・・・・

ヴァリエール家

「カリーヌ！ルイズから手紙がきたぞ！」
「あらぁ、でもなんでそんなに慌ててるの？」
「いいから読んでみぃ！」

私は主人に急かされるままルイズの手紙を読み始めました、その内容は魔法を成功させたと言う事だったのです、それにも驚いたけど、更に驚いたのは、魔法を成功へと導いた使い魔として召喚された公爵家の貴族、リュウとルイズは呼んでいるこの人には感謝しなければ

「使い魔として東方のメイジを喚び出すとはな」
「ええ、でも彼のおかげでルイズは魔法を成功させたのよ？」
「これはヴァリエール家の名に懸けてその彼に御礼をしなければ！」
「当然だわ！ルイズに手紙を送って私が使者として向かいに行きますわ」

それにしても東方のスクウェアクラスのメイジ・・・１回手合わせしてもらえないかしら？

リュウサイド

今俺はルイズの魔法の精度を上げるためにどんな訓練をしようか考えている、う～ん・・・そんな時

「失礼しますミス・ヴァリエール、ご実家からお手紙です、では・・・」

シエスタ手紙を渡すと足早に去っていった、ルイズが手紙を見ると顔を青くした

「お、おい！ルイズどうした！？」

「そ、それが、て、手紙にお、お母様とエレオノール姉さまがリュウを家に招きたいから迎えに来るって・・・」

「マジかよ・・・でいつ来るんだ？」

「あ、明日・・・」

「おいおいおいおいおい！急ってレベルじゃないじゃん！」

「い、急いで準備しなきゃ～！！」

俺とルイズは急いで準備を始めた、明日から長期の休み合わせたんだろう、歩く災害烈風のカリンが来るのかよ

・・・生きてるかな・・・俺・・・

家族への手紙　（後書き）

引き続きヒロインを募集中です

対面！歩く災害、烈風のカリン！！

ルイズの家から手紙がきて一日、ついに烈風のカリン、降臨の日がやってきたルイズは俺がスクウェアクラスという事と腕を再生した事を書いてしまったらしいおそらく烈風様のことだから戦いたいって言われるな・・・チート人間だけど、不安
今は学院の門の前で烈風様とエレオノール様を待っている状態だ

「・・・何時頃来るんだろう？」
「多分もうそろそろだと思うんだけど・・・ブルブル」
「お、おい、大丈夫かよ？すげぇ～震えてるぞ？」
「む、昔からの癖でと、止まらないの・・・」
「いやどんな恐怖体験したんだよ？お祝いに来てくれるんだから震えなくていいだろ」
「そ、そうなんだけど・・・」

相当な恐怖体験したんだろうな、ルイズを見て恐怖感と不安しか伝わってこない、だからこそ次女であるカトレアに優しくされて大好きなんだろう、まあ俺には姉さん居なかったけどな、妹居たけど

「まあリラックスだ、家族に会うだけなんだから」
「そ、そうね」

ルイズはようやくリラックスしたようで恐怖心が和らいだようだ、その直後に竜籠の一団がやって来た、籠にはヴァリエール家の紋章が刻まれているから間違いないだろう、さて、俺も腹を括るか

「お久しぶりねルイズ、がんばってる？」
「ちびルイズ少しは背伸びたわね」

「おおおお、お久しぶりですお母様、エレオノール姉さま」
緊張し過ぎだって
「ルイズ、ところ貴あなたの隣に居るの男性はどなた？」
「自己紹介もしないだなんて無礼な男ね」
「えと・・・その・・・手紙にも書いた私が召喚した使い魔のリュウです」
「え？」
お～いエレオノールさ～ん顔が青くなっとるよ～
「さて自己紹介と行きましょうか、俺の名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼです
東方の国ロバ・アル・カリイエの公爵家の次男です、どうぞ宜しく」
「これはご丁寧に、娘が失礼いたしました」
「いえいえお気になさらずに」
「有難う御座います、私はルイズの母でヴァリエール家の公爵夫人をやっております、カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールです、今後宜しくお願いします」
「わ、私はエレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールよ、覚えておきなさい」
うん覚えるのはいいけど声が震えてるぜ
「エレオノール、貴女ルイズの恩人に」
「でも！」
「まあ詳しい話は家でしましょう、行きましょう」
カリーヌ様の声で俺達は荷物を積み籠に乗ったもちろん空もスター

も一緒だ

「ところでその狼と龍はなんですか？」

「こいつらは俺の使い魔です」

「2、二匹とも！？う、うそでしょ・・・」

「本当なんですよ、姉さまでもリュウ、スターそんなに小さくなかったでしょ？」

空は俺の膝の上、スターは俺の頭の上に乗っている、スターは大き過ぎるので小型化の魔法（オリジナル）を掛けて頭に乗れるサイズまで小さくした、デフォルメしたみたいで可愛い

「スターには小型化の魔法を掛けて小さくしたんだよ」

「そんな魔法あった？」

「故郷の魔法さ」

そんな話をしている内に到着

「着きましたよ」

結構でかいな、さすがはトリステインの大貴族だな、俺はカリーヌ様に案内され公爵の待つ部屋へと向かう

「あなたはいりますよ」

扉を開けるとそこにはルイズの父、ヴァリエール公爵が居た

「おお！ルイズ元気だったか！」

「あなた違うでしょ」

「すまんすまん、久しぶり会ったからの」

これが噂の親馬鹿ってやつか

「おお、お主が」

「はい、私は東方の国ロバ・アル・カリイエの公爵家の貴族、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼです」

「おお、ご丁寧に、まずは礼を言わせてくれ、君のおかげでルイズが魔法を使えるようになれた」

「私からも」

おいおい、公爵もカリーヌ様も頭を下げないで！お願いだから！

「あ、頭を上げてください、私はたいしたことはしておりません、ルイズの進むべき道を印したまでです」

「いえ貴方には感謝して仕切れません、本当に有難う」

「それで話を変えるのじゃが、君が火龍によって失ってしまった腕を再生させたと言うのは本当かね？」

「はい、事実です」

「で、では聞きたい事がある、その力で病気を治すことは出来るか？」

「ええもちろんです」

「では、娘のカトレアを見てやってくれんか！」

やっぱりきたか、公爵は頭を下げてきた

「お、お父様！この男にカトレアを見せるのですか！？それに頭を下げるなど！！」

「カトレアが健康になるなら喜んで幾らでも頭は下げる、頼む！カトレアを見てやってくれ！」

「・・・わかりました、ではまずわかる範囲でいいので、症状を聞かせてもらいますか？」
「ああ！有難う！」

ふむふむ、症状はまず、吐血を伴う激しい痛み次に秘薬や魔法により一時的に回復はするも時間経過により症状がぶり返す、最後に魔法を使うとより症状が悪化するか・・・血を吐くって時点で思い浮かんだのが白血病、だがまだ不十分だ

「だいだいわかりました、では申し訳ありませんがカトレア嬢の所までご案内して貰ってもよろしいでしょうか？じかに診察をします」
「わ、わかった」

俺は公爵の案内でカトレアの部屋へと向かった、さてこれからが勝負だ、絶対に治してやる、そのためにカヲル君にこの治療能力を貰ったんだから

対面！歩く災害、烈風のカリン！！（後書き）

次回、カトレア治療です

カトレア治療

リュウサイド

俺は公爵に案内されながらカトレアの病気について考えていた　血を吐くという事から予想できるのは白血病だがそうとはかぎらない、俺の能力で治す事は簡単だろうが、不安はある

「ここだ、カトレアわしだ入るぞ」

「あ、はいどうぞ」

公爵が扉を開けるとそこには・・・ムツゴロウ王国ならぬカトレア王国が広がっていた、頭の上にスターは呆れてるぞ、空は、軽く驚いている

「あらぁ？お父様、そちらに居る狼と可愛らしい龍を頭に載せているお方は誰なのですか？」

「この者はお前の治療をしてくれる、東方の国ロバ・アル・カリイエの公爵家の貴族、リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ殿だ」

「はじめまして今紹介にあずかりましたリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼです以後お見知りおきを」

「は、はいよろしくお願いします」

ふむ、アニメは見ていたが綺麗な人だな、なお更治さなければ

「では診察をおこないます」

「うむ、頼むぞ」

俺はベットの近くにある、椅子に座った

「では診察をしますので私の手の上に手を置いてください」

「はい」

カトレアは俺の言葉どうりに手を乗せた、俺は目を閉じ集中する・・・

「・・・では行きます・・・」

カトレアの身体の情報が頭に送信されてくる、・・・肉体的には問題なし、長年の運動不足で身体が鈍っているが問題ないさて、次は臓器だ・・・主な臓器には問題と言いたい所だがガンが肺に転移してやがるこれはやばいな、しかも白血病まで発症してやがる、良くこんな状態で生きてるな感心しちゃうよ

他にはないなよし！

俺は目を開いた

「病気が分かりました」

「ほ、ホントか！？」

「ええ、まず人間の呼吸する上で大事な器官、肺に悪性腫瘍が出来ております、そして人体にとって重要な白血球というものが異常増殖する白血病です、生きているのが不思議なぐらいですの病気ですよ」

「そう・・ですか・・やはり私は治らないのですね・・・」

いやいや泣かんでくれ、生きてるのが不思議とは言ったが治らんと言ってないぞ

「落ち着いてくださいカトレア様、生きてるのが不思議とは言いましたが治らないとは一言も言ってませんよ？」
「え！？じゃあちい姉様は！？」
「治りますよ、確実に」
「ほ、本当か！？」
「ええ」

公爵夫妻は涙を流しルイズはカトレアに抱きつき泣いている

「では治療に入ります、皆さん下がってください」

皆に警告し下がってもらう

「少し苦しいかもしれませんが我慢をお願いします」
「はい！願い年月の痛みよりましです！」
「では行きます！ハァ～～！」

俺は意識を集中し手を前に出す

「この者に蔓延る不幸よ、今こそ消え去りこの者には引き換えに幸せを与えよ、我が力によりこの者を癒さん！
開放せよ！長年の不幸から！新たに羽ばたく世界へと誘え！オールアナザーワールド！！！！」

俺が唱え終わるとカトレアに優しく強い光が降り注ぐ

「「「！！！」」」
「この光・・・暖かい・・・」

どうやら苦しくはないようだ、光が消えカトレアに具合を聞く

「どうですか気分は？」

「ええ！とっても良いですわ！それに身体が凄く軽いのです！いまなら全力で走れそうです！！！」

「リュ、リュウカガ殿！カ、カトレアは・・・」

「ええ完全に完治しました、一応水メイジに確認させてください、俺は外に居ます」

「す、直ぐに水メイジを呼べ～！！！」

俺が部屋を出るの同時に公爵が叫んだ

カトレア治療　（後書き）

中2病全開になってしまいました

対決！烈風対リュウガ！使い魔の秘密（前書き）

ついに主人公に危機が！
そして新事実が！！

対決！烈風対リュウガ！使い魔の秘密

俺はカトレアの治療のあと外に出て適当な地面に座って頭を抱えていた

「・・・なんだよあの魔法の前口上、厨二病全開じゃあね～か・・・」

そうカトレアを治す際の魔法の事で頭を抱えていた、そんな俺を心配してくれてるのか空が膝の上に乗って心配そうな声を出して頬をなめてきた

スターは肩の上からポンポンっと頭をたたいてくれた

おい、お前らどんだけ優しいだよ、俺の傷ついた心に相棒達の心遣いはとても心にジ～ンと来た、俺は空を抱きしめた

「有難う、空、スター」

「バゥ～～ン／／／／」

「ポリポリ／／／／（スターは照れ隠しに頬を？いてます」

いや～癒される、空は抱きこごち最高だし、スターは優しいし最高！言う事なし！俺の心の傷も癒えました

「て、照れますよリュウガさん／／／／」

え？

「礼を言われると照れる／／／／」

は？？

「あれ？どうしたんですかリュウガさん？」
「どうした？リュウよ？」
「あれ？おかしいな？空とスターが喋ってる感じしたんだけど・・・もしかしなくても喋る？」
「はい♪」
「うむ」

・・・・・・・・えぇ！！！！？？？？！？！？MA・ZI・DE！？おいおいマジかよ！てか喋れたんかい！

「それなら何で喋るなら言ってくれなかったんだよ！？」
「「そ、それは・・・」」

あれ？地雷踏んだ？
空とスターは言いにくそうに口を開いた

「だって狼が喋ったら気味が悪いでしょう？それで捨てられるのが恐くて・・・折角リュウガさんと仲良くなれたのに
・・・だからです・・・グスッ」
「お、俺は初対面のはずなのにあんなに俺を慕ってくれて心の奥底から俺を信頼してくれるリュウとの関係が壊れるのが恐くて・・・」

そうか・・・二人とも不安でいっぱいだったんだな・・・俺はスターの小型化を少し弱め空と同じサイズにして二人を抱きしめた

「リュ、リュウガさん？」
「リュウ？」
「・・・ごめんな、相棒であるお前達がこんなに不安でいっぱいだ

ったのに気付かなくて・・・
だけど安心してくれ俺はお前達を気味悪がったり、捨てたり、酷い事はしない・・・俺達は一つだ」
「リュ、リュウガザ～ン」
「リュウ・・・」
「契約で結ばれてるからじゃなくてな、俺はお前達がどんな秘密を、過去を持っていても俺はお前達のそばに居るそれに俺はお前達が来てくれて嬉しかったよ、しかもこれからは会話が出来るもっともっと仲良くなろうな」
「ハイ、リュウガさん、グスッ」
「ああ、リュウこれからも宜しくたのむ」
「ああ」

俺は相棒達との絆を深められた気がする
俺は誓おう
どんな事があっても相棒達の支えとなろう

「って今思ったんだが、空ってメスなのか？」
「ハイ♪」
「マジか、それで女の子っぽいと思ったああ謎が解けた、ああ後喋るのは俺と一緒のときだけにしてくれよ他の連中に知れるとめんどくさい」
「え／／／わ、私とリュウガさんとの二人っきりの秘密って事ですね／／／」
「俺も居るんだが・・・」
「アハハッ」

この世界に来て初めて心の奥から笑った気がした

「リュウガ様」

名前が呼ばれたので振り向くと執事の御爺さんがこちらに歩いてきた
「おお、此方にいらっしゃいましたか、カトレア様は完全に健康体になっておりました私からのお礼を言わせていただきます」
「いえお気になさらずに、それとなぜここに居ると？」
「はい、リュウガ様を探しておりましたら笑い声がしたのでもしかしたらと」
「ああなるほど、でなんで俺を？」
「おおそうでした！カリーヌ様がお呼びですささどうぞこちらへ・・・」

その前にスターに小声でさっきにサイズに戻してくれと言われた
何故か？っと1聞くと「リュウの頭の上が一番落ち着くんだ」っと言われたので了承してスターに小型化の魔法を掛け直し頭の上に乗せた、そして執事に着いて行くとそこはバトルフィールドのような場所だった
ま、まさか・・・

「お待ちしておりましたよ、リュウガ殿♪」

出た～！中央で待っておりましたのは歩く災害、烈風のカリン！！
ま、まさか今戦うってわけじゃあ・・・

「な、なんでカリーヌ様がここに・・・」
「いえまずはカトレアを健康にしてくれた御礼をしようと思いまして、本当に有難う御座いました、カトレアの母として公爵婦人としてお礼を言います」
やっぱり本当は優しい母親なんだな～うんうんって待てよお礼とバ

トルフィールドはどんな関係が・・・

「でなぜここに？」

「貴方がどれほどの力があるか見せていただきます」

「え！？ですがカトレア様についていた方が・・・」

「それは主人に任せてありますわ♪カトレアも大丈夫って言ってたし♪」

「は、はあ」

「ではいきますよ」

「はあ、分かりました」

「では行きますよ！エア・ハンマー！」

目視は出来ないが風の流れで軌道はわかる

俺はジャンプでよけ反撃する

「エターナル・エヴォリューション・バースト！」

この技は映画のＳｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンの技をイメージしたものである、俺の周囲に三つの火球を作り発射するだが

「エア・シールド！」

エア・シールドで防御される

「なかなかの威力ですね、あなたが４属性のメイジであるということは本当のようですね」

「ええ、まだ水は使ってませんけどね、次！アイスランス！」

大量の水を出し一気に温度を下げ氷の矢として打ち出す、これはどうだ！

「ふふふ、ではこちらもウィンディ・アイシクル！」
カリン様も氷の矢を出し俺のアイスランスを相殺する
「これでどうだ！ハウリングランチャー！」
土を盛り上がらせ、それを超高温の炎で溶かしそのまま打ち出す
「ならば！カッター・トルネード！！」
でた！烈風のカリンの十八番カッター・トルネード！！
ハウリングランチャーと真空の層を間に挟んだ竜巻、カッター・トルネードがぶつかり合い相殺される
「まあ♪私のカッター・トルネードが相殺されるなんて」
「まさかハウリングランチャーが相殺するとは・・・さすがですな」
「ええ貴方もたいした腕前ですね、キョウはここまでにしましょう♪」
「そうですね」
俺とカリーヌ様は握手をした
「所でリュウガ殿は結婚する相手はいるのですか？」
「いえ、いませんが・・・」
「そうですか♪（ニヤニヤ）」
「？（なんかやな予感が・・・）」
身の危険を感じつつ俺はカリーヌ様の後に続いてお屋敷に向かった

タバサとリュウガ（前書き）

久しぶりの投稿です

タバサとリュウガ

俺はあの後カトレアに会い体の調子を聞き問題ない事を聞くとほっとした
そしてその後はカトレアの運動療法に付き合い学院に帰った
結局カリーヌ様の笑いの真意は分からずじまいだったが・・・
俺は夜に森でハイパー死ぬ気モードの訓練をしていた
流石にXグローブで空を飛ぶのは難しかった
特に姿勢制御が難しい
よくツナはできたなぁと感心するほどだったが
それも何とか会得した
流石にXバーナーはやめておいた
森が吹っ飛ぶ何処じゃすまないからな
ボックスも開けられるようになった
にしてもナッツ達は可愛いかった！
瓜なんか擦り寄ってきたぐらいだった
そして今は魔法の練習をしている

「ウォーターボール！」

直径1メートルほどの水の玉を作り一気に温度を下げて氷を作って錬金で即席の入れ物を作って氷を砕いてこれまた即席で作ったシロップをかけて食べる

「う～ん♪美味い♪やっぱり体が火照ったら冷たい物だな♪なあそうだろう？雪風のタバサとシルフィード？」
「「！？」」
「そこに居るのは分かってる出てきなさい」

俺がそう言うと近くの木の陰からタバサとシルフィードが出てきた

「・・・何時から？」

「俺がこの森で魔法を使おうとした時からだ、食うか？」

カキ氷を差し出す

「・・・コクッ・・・」

「きゅいきゅい私も食べたいのね「ゴンッ！！」痛いのねお姉さま！」

「喋っちゃダメ」

「ほう・・・韻竜か・・・まあ驚きはしないがなほら」

俺はタバサとシルフィードにカキ氷を渡す

「・・・シャクシャク・・・美味しい・・・」

「きゅい！甘くて美味しいのね！」

「あんまり急いで食べるなよ？頭が痛くなるから」

「・・・コクッ・・・」

「わかったのね」

タバサとシルフィードはゆっくりと食べる

「で何の用？」

「ルイズから聞いた貴方が不治の病にかかった姉の病を癒したって・・・」

「（やっぱその話か・・・）ああ事実だが？」

「・・・心の病も治せる？」

「・・・できる・・・」

「！？本当！？」

「ああ、薬だがな」
タバサはいきなり土下座をしてきた
「!?・・・何の真似かな?タバサ?」
「お願い・・・その薬を譲ってほしい・・・お金だって出す」
タバサは泣きながら訴えてくる
「やれやれ美少女が泣きながら土下座をして頼んでるんだから断るわけにはいかないな」
「!?じゃあ!」
「ああ、今は無理だが準備ができたら譲ってやるよ無料(タダ)でな」
「あ、ありがとう・・・うううう・・・」
タバサは泣き出してしまう
俺はタバサを優しく包み込むように抱いた
「?」
「泣いちゃえよ、今まで辛かったんだろう?何か深い事情があるみたいだが誰かを頼れ、俺が支えになってやる
辛いと思ったら辛いって言え、悲しかったら悲しいって言え、相談したんなら俺に言え力になってやるよ
リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼの名に懸けてな」
そうしてタバサは俺の胸の中で泣いた
今までこの小さな身体で苦しみを溜め込んでいたのだろう
俺はタバサが泣き止むまで優しく抱きしめるとにした
・・・どれほどの時間が経っただろう

「落ち着いた？」
「・・・コクッ／／／」
何故か頬が赤い

「そうか」
「聞いてほしい事がある」
「なんだ？」
「・・・私のタバサって言う名は偽名」
「本名は？」
「シャルロット・エレーヌ・オルレアン」
「シャルロット・・・いい名だ美しい名だな」
「／／／」

タバサもといシャルロット顔を赤くした

「・・・二人っきりの時はシャルロットって呼んで」
「・・・わかったよシャルロット」
「きゅいきゅい良かったのねお姉さま！」
「・・・」
「きゅい！貴方の事お兄様って呼んでもいいのね？」
「好きにすればいいさ」
「きゅい！やったのね！お兄様ができたのね！」
どうやらゼロ魔での目標が叶達成できそうだ

リュウガの怒り

俺は最近４時ごろに起きトレーニングをしている
最近はＸグローブをつけハイパー死ぬ気モードになり森の中で特訓をしている
森の木を障害物としそれを剛の炎で超高速で間を縫うように移動するという事をしている
そして上空１０００メートルでＸバーナーのテストもした
コンタクトをしなくても頭に直接、炎の量と両手が一直線になるのが解った
さすがに３万　ＦＶ（フィアンマボルテージ）にしておいた
それでも俺の炎の精製度が高いのかとんでもない威力だった
雲にめがけて打ったら雲が一瞬にして消えた
これは人体相手だと１万じゃないと死ぬなっと思った
俺はテストを終えるとルイズを起こす時間になったので起こし
厨房で食事を貰い今は授業を受けている
だがこの授業はギドーの授業の為果てしなく不愉快だ
因みに俺はルイズの隣ではなくタバサの隣に座っている
俺は席がなくは立っていようと思ったが
タバサが自分の隣が空いているっと言ってくれて座った

「ミス・ツェルプストー最強の系統はなんだね？」
「え～と虚無ですか？」
「伝説の話ではなく現実としての話だ」
う～ん最強の系統か・・・使い方によるから解らないぞ？
「すべてを焼き付くす業火の火の系統だと私は思いますわ」

間違いではないな

「残念だが最強なのは風の系統だ」

そうか？

確かに風系統の呪文は優れている

だがそれは使い手による

「そうですかね？」

「ではミス・ツェルプストー疑問に思うなら私にお得意の火系統の魔法を撃ってみなさい」

「火傷じゃすみませんよ？」

「構わん撃って来い、それともツェルプストー家の情熱はその程度なのか？」

馬鹿かコイツは？

生徒を挑発して挙句の果てに家名まで侮辱したよ

キュルケは完全に頭にきて立ちあがり攻撃呪文を唱え始めた

フレイムボールよりデカイ

トライアングルスペルクラスの魔法だろう

特大の火の玉はギドーに向かうが

ギドーは杖を指揮者棒のように振り火の玉をキュルケに向かって跳ね返した

キュルケにあたる直前に俺は剃を巧く使いキュルケを抱き寄せ火の玉が当たるのを阻止した

「怪我はないかな？レディ？」

こういう時は紳士的に振舞えと母さんと父さんに言われたので実践してみる

「え、ええ／／／」

良かった怪我はしていないようだ
俺はキュルケを身体から離した

「どういうつもりだ貴様？授業妨害か？」

ギドーは俺が貴族であることを知ってや知らずか脅すように声を出してきた

「俺はただレディが怪我するのを防いだまでだ」
「ふん、貴様はミス・ツェルプストーと関係でもあるのか？」
「いやだが母と父は人が怪我をしそうな時は可能であれば全力で守れといわれたので」
「ふん、下らん事を言う母親と父親だなだな」

・・・コイツ今なんて言いやがった？

「おい・・・貴様今なんと言った？」

俺は殺気を出しながらギドーに言う

「聞こえなかったのか？貴様の親は下らん事を言うと言ったのだ、怪我は自分のせいで起きるものだ」

コイツ・・・父さんと母さんを侮辱しやがった・・・
許さん・・・父さんと母さんは俺の誇りだ！

「・・・貴様、俺の事はどれだけ侮辱しようが構わんだがな！！」

俺は殺気を更に出す
「俺の誇りである父さんと母さんを悪く言う事だけは許さん！！！！」
ギドーは俺の殺気に震えている
ギドーだけではないほかの生徒も同様にだ
「ふ、ふん！貴様の親などたがが知れた三流であろう！！」
ブチッ！！
コイツ殺す！！！
「なら表に出ろ・・・」
「ほう？この私と決闘でもする気か？」
「そうだ貴様のその自信をへし折ってやろう」
「いいだろう！！」
俺とギドーは表に出た
他の生徒も見たいのか出てきた
「ふん！私の力を見て驚くなよ！」
「・・・」
俺はXグローブをつけハイパー死ぬ気モードになった
「「「「「「「なっ！額から炎が！？」」」」」」」
「さあ貴様の言う風が最強なら俺の攻撃を弾いて見せろ」
「造作もない！さっさと撃て！」

「まて、そこの生徒どけ危ない」

ギドーと俺の後ろにいる生徒をどけ俺はXバーナーの発射体制に入った

まずは後ろに柔の炎を出す

「炎を逆に！？」

キュルケは激しく驚いている

「はっ！私に攻撃するのではなかったのか？」

あの野郎に目に物見せてやる！

頭の中に音声が流れてくる

『レフトバーナー炎圧上昇、３万、４万、５万ＦＶで固定

ライトバーナー柔から剛に変換しつつグローブクリスタル内に蓄積

３万、４万、５万ＦＶターゲットロック、発射スタンバイ！』

流石に５万で固定殺していいがこんな外道殺してたら俺も同じになってしまう

「受けるがいい・・・」

「ふん！跳ね返してくれる！」

ギドーは鼻で笑い杖を構える

「Xバーナー！！！」

俺の右手から撃ち出された爆発的なエネルギーはギドーの魔法を飲み込みギドーをも飲み込む
今回は炎の錬度を下げているがXバーナーを撃ち終わったらギドーは黒焦げになっていた
一応生きてはいる

「手加減はした、見た目ほど身体にダメージはない」
「あがが・・・こ、これはスクウェア以上の威力・・・」
「ふん！ギドー貴様に俺の名を教えてやろう！
俺の名はリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼ！
東の国ロバ・アル・カリイエの公爵家の次男だ！
我が父と母は偉大なメイジ！！
我が父と母を侮辱した罪を味わえ！」

俺は生徒の皆のほうを向いた

「脅かせてすまない・・・だが俺は家族を侮辱されたのが許せなかったのだ・・・」

俺が頭を下げると周りは静かになったが拍手をしてくれた

「すご～い！あのムカつくギドーを一発だ！」
「胸がスカッとするな！」
「すごいすごい！！」
「「「キャ～～リュウガ様ぁ～！！！」」」

とにかく様々だが皆から喝采を浴びた

「ねえ」

キュルケが話しかけてきた

「さっきは助けてくれて有難う、あのままだったら大火傷してたわ」

「気にするな」

「そうはいかないわ、ねぇ今夜私の部屋に来ない？」

「嬉しい申し出だが断らせてもらうよ」

「え～」

この後はコルベール先生が来るまで俺は質問攻めにあった

使い魔品議会

本日は使い魔評論会の前日
原作の流れとは少し違ってしまったが何とか前日デルフを回収する事ができた
ほとんどの生徒は品議会に向けて練習を始めている
俺も広場に来て何かをやろうと考えている
Xバーナーでもいいがさすがやばすぎる
だから迷っている・・・
う～ん・・・あ！そうだ俺龍神族だったな
だったら・・・ニヤリ・・・
故郷の魔法とでも言っておけば問題ないだろう

『リュウガさんどうするんですか？』

空が話しかけてきた
俺は空の頭を撫でる

『あん・・・むぅ／／／／』
「なにがだ？」
『ほら使い魔品評会ってやつで何をやるんだ？』

頭の上で小型化してあるスターも話しかけてきた

「今思い出したんだけど俺　龍神族だって事思い出したんだ」
『龍神族って確かリュウの一族だよな？』
『噂だと人間と神の力を持った龍の間に生まれた人達で強靭・最強・無敵の名前をほしいままにし人間が愚かな行いをしないように監視する役目もあるって聞いた事もありますけど・・・』

うん、俺の記憶にそう刻まれている、だけど某カードゲームアニメの社長さんの名台詞じゃね？それ・・・

「ああそうだだからちょっとまたその力を使ってみたくなってね」
『こんなくだらない事で龍の力を使っていいのか？』
「なあに俺が唯変化するだけだから故郷の魔法と言っておけば納得するだろう」
『まあハルギゲニアじゃまったくリュウガさんの国の情報は入ってきませんからね』
「おうおう俺も話しに入れてくれよ」

デルフが鞘から出てきた

「にしても相棒そんな一族だったのかよ」
「まあね龍神族は長生きでね、父さん達も４０ぐらいだけど俺達はほとんど永遠の命なのさ」
「おうおう長生きってレベルじゃね～なそれなら末永く相棒と一緒に入れるな」
「まあなスターと空にも俺の力を入れたから俺のと同じくらい長生きするぜ」
『マジか？』
『え／／／じゃあ私の中にはリュウガさんが入ってるですね！？』
「おうおうねーちゃん入ってるのは相棒の力だぜ？」
『わ、解ってますよ！！！／／／』
「ほう？にしては私の中に相棒が入ってるなんて言ってなかったか？」
『も、もう！！！／／／デルフさん！！もう言わないでください！！！』
「ククク・・・」

『ふふふ・・・』
『リュ、リュウガさん！スターも笑わないでください！！』
「悪い悪い」
『俺も悪かったよ・・・』
「オレッチもから言いすぎちまったすまなかったねーちゃん」
『解っていただければ・・・』
「でもねーちゃんその色ボケは治したほうがいいと思うぜ？」
『ほ、ほっといてください！！』

そして時は流れ・・・
使い魔品評会当日・・・

「ついに私の番・・・」
「いややるのは俺だぞ？」
「ていうかなにをするの？」
「秘密だ・・・」
「最後はミス・ヴァリエールです」

ルイズは一人で舞台に上がる
俺は１２対となっている天使の翼を背中に生やす

「おいおい使い魔はどうした？」
「今来ます、私の使い魔を紹介します」

おし行くぜ！
俺は一気に上昇しステージの上空に浮き全員の注目を集める
シューティング・スター・ドラゴンのようにてを横に広げる

「綺麗・・・」

誰かが感想を漏らす

「私の使い魔はここから東の国、ロバ・アル・カリイエの公爵家の貴族
リュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼです！」

俺はゆっくりとステージに降り立つ

「今ご紹介にあずかりましたリュウガ・ヴァザグール・ナンブ・ブロウニング・ド・ヴァイスリーゼです
私はここで皆様に私の故郷の魔法をお見せしようと思います」

俺はポケットからリングを取り出し俺の周りに投げる
リングは大きくなり俺の周りに展開する

「さあ・・・見るがいい！
集いし願いが新たに輝く星となる光差す道となれ！スターダスト・ドラゴン！」

俺の身体は変換され巨大な白銀の竜になった

「どうだ？これは我が国に伝わる変身術」
「す、すごい・・・」
「これが・・・ロバ・アル・カリイエの公爵家の力か・・・」
「美しい・・・」

ほとんどの者は圧倒されているか感動している
俺は王女に手を差し出す

「空の旅へとご招待いたしましょう」
「よろしいのですか！？」
興奮しているな・・・
「はいもちろんです」
「王女様いけません！ってあれ～！？王女様は！？」
「アンリエッタ様ならもうあの龍の手の上ですけど・・・」
護衛は止めようとするがすでにアンリエッタ王女はすでに俺の手の上
「では行きます」
俺は飛び上がり学院の周りを旋回し始める
「はあ～・・・肌で飛ぶ時の空気を感じるというのは気持ちの良い事ですね」
「そうですね王女様」
俺は１５分ほど空を飛んで降りたら王女は大満足
ルイズの優勝が決定し満足そうだ
そしたら轟音が響き
俺が見に行くと巨大なゴーレムが壁を破壊し術者が何かを持ってゴーレムを使い逃げていった
攻撃はしてみたがやはり直ぐに再生されてしまった
確か犯人は土くれのフーケ・・・いやマチルダ・・・
ティファニアと接触するには彼女からが一番だな
アニメ見てたけどなんか辛そうだったしな

厄介事は慣れている　それと俺のお見合い？前編

現在俺は学院長室にいます
なんか土くれのフーケに奪われた
『破壊の杖』・・・もといロケランの奪還の会議をしている
フーケもといマチルダはどっかに逃げた
これからどうするかと言う会議のはずだが
明らかに責任の押し付け合いだ
そんな時タバサが俺のマントを引っ張ってきた

「・・・進展してない」
「だな」
「どうする？」
「ん～あ～皆さんよ～責任の押し付け合いしたいんならこのままで良いけどよ
今は捕られたもん取り返すのが先決だろ？」
「・・・そうじゃなミスタ・ナンブの言う通りじゃ」

この後俺、ルイズ、タバサ、キュルケで『破壊の杖』奪還に向かった
その前にマチルダと話をする

「あんたフーケだろ？」
「！？・・・なんのことでしょう？」
「あんたは先ほど朝から調査して馬で四時間、往復で８時間って言ったよな？
その時点でばればれだ」
「あ・・・よく気付いたね、であたしをどうする気だい？」
「・・・あんたは特別な事情を持つ家族がいるな？」
「！？！？な、何でその事を！？」

「あんたの目には家族のための念を感じる」
「・・・さすがは公爵家の貴族だね」
「伊達や酔狂で公爵家の次男は務まらん、そこで相談だが・・・」
「なんだい？」
「俺と手を組む気はないか？」

・・・・・・・
話の内容はこうだ
錬金で偽のフーケを作りそいつを使いフーケは逮捕すると言う筋書きだ
マチルダは快く乗ってくれたよ
俺はルイズたちが待つ馬車に乗りフーケの潜伏場所に向かい
そこでロケランを発見した
そこで偽フーケの登場
戦って偽フーケを捕縛し学院に戻った
まあ色々あって今は舞踏会だ
だが俺はそんな物に興味はない
俺は適当に外で酒を飲んでいる
すると♪～♪～
遠交信の鏡・・・もとい携帯がなり通話ボタンを押し
スクリーンに父さんが現れる

「父さんどうしたの？」
「いきなりで悪いが一時的にこちらに帰ってこれるか？」
「・・・はい？」

え？いきなり帰ってこいですか？お父様？

「いやなんで？」
「お前に見合いの話が来ている」

「いやそんな日常茶判事だったじゃん？」
俺には毎日毎日大量の見合いの申し込みが来るのだ
まあ断ってるけどね結婚する気ないし

「何時も道理断れないの？」
「そうもいかん相手でな」
「わにゅ？どういう事？」
「お前はゼオラ嬢を覚えているか？」

ゼオラ、ゼオラ・・・スパロボだとアラドとレッツゴールイン！する子だよな・・・
え～っと記憶検索ゼオラ嬢っと・・・
ミサイル？ジャマーでじゃまーするぜ！なんてな！ってどうでもいいわ！
なんでアホセルでてくんねん！
気を取り直して・・・お！あったあった！
え～っと俺とゼオラ嬢の関係は・・・ゼオラ嬢は俺より５つ年下の１６で
小さいときはお兄様と呼ばれ最近ではリュウさんと呼ばれている
幼馴染って言うのか？これ？
ここまでで使用時間１秒

「うん覚えてるよ」
「そうかそのゼオラ嬢との見合いの話が来ているんだ」
「・・・スミマセンモウイチドオネガイシマス」
「・・・片言になってるぞゼオラ嬢との見合いの話が来ている」
「・・・マジで？」
「マジだ」
「・・・行かなきゃダメ？」

「ああ来い」
「了解いたしますのことよ」
「・・・ラミアが混じっているぞ」
「いえ気のせいでありんす」
「まあ・・・明日には来い」
「はい」

ブツッ
・・・ショックのあまり父さん達の知り合いのラミアさん出ちゃった
俺はため息を付きながらルイズと学院長に許可を取り
スターを頭の上に乗せ空を抱っこしてシステムXNを使って空間転移
俺の家に着いた

「リュウ早いな」

父さんが都合よくいた

「うん」
「ゼオラ嬢はもう既に来てるぞ」
「え!?早!」
「早く行ってやれお前の部屋にいる」
「何故に俺の部屋!?」

俺は急いで部屋に向かった
ドアを開けるとそこにはゼオラ嬢がいた

「またせたな、ゼオラ嬢」
「あ!リュウさん!」

ゼオラは俺の方に近づいてきた

「お久しぶりです！」
「ああ本当だな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1244v/

ゼロの使い魔　伝説の力を持つもの

2011年10月7日03時01分発行